

活気づくネットワーク投資 IPシフトに拍車かかる

PBX/ビジネスホン

深刻な不振にあえいだ05年度 “ワークスタイル変革”で巻返し

2005年度、PBX市場はついに400億円の大台を割る。

情報通信ネットワーク産業協会(CIAJ)は『2005年度通信機器中期需要予測』において、05年度の国内出荷金額は396億円に落ち込むとの見通しを示した。04年度実績の437億円と比較すると、実にマイナス9.4%の大幅減である。

ここまで低迷したのは、中・大容量クラスの不振が響いたためだ。小容量は前年に引き続き堅調に推移したものの、中・大容量は振るわなかった。CIAJでは、その理由を「大型案件の需要減や品川等再開発地域での重役が一段落したため」と説明している。

ユーザー企業の関心がIP電話に向かったのは、言うまでもなく02年末の東ガスショックがきっかけだ。その

後、CIAJが指摘する通り、大規模再開発に伴うオフィス移転ブームも追い風となって、03～04年は大型案件が相次ぐことになった。

ところが、ブームと言うべき状況は04年後半には終息。代わって、05年に市場でよく耳にしたのが「様子見」という言葉だった。

PBXの償却を前倒してまでIP電話システムに移行するような積極的な動きはもう見当たらない。自社のPBXの更新時期を考慮しながら、慎重にIP化を検討していくフェーズにユーザー企業は入ったと言えよう。

だが、これは考えてみれば当たり前の話で、PBX更改のような大規模投資がそうそう一挙に進むわけではない。その意味では、05年度はブームの揺り戻しの年だったと振り返ることができるだろう。

Point!

- ① 2005年度のPBX市場はついに400億円の大打撃。だが06年度以降はプラス基調に転じ、1年で大台を回復
- ② ビジネスホン市場も05年度は不調に終わり、前年度比45億円の大幅マイナス。06年度はもち直すものの、微増にとどまる見通し
- ③ 期待は“ワークスタイルの変革”による生産性向上。成果が出れば、高成長の可能性も

手痛い直収電話の直撃

不振にあえいだのはビジネスホンも同じだ。04年度のビジネスホン市場は、前年度比8.8%増の620億円と久々の活況に沸いた。050番号を利用したIP電話サービスが通信事業者各社から出揃ったことを受け、各社は外線通話コストの削減を目玉にした提案を展開。これが見事奏功した結果だった。

だが、05年度は一転。前年度から45億円減、7.3%マイナスの575億円になる見込みだ。03年度の570億円と比較すれば、若干伸びているとも言えるが、関係者の落胆は大きい。05年度中間決算では岩崎通信機が赤字に転落するなど、各社とも軒並

図1 PBXの国内市場予測

